

阿含・ニカーヤにおける三十二相と白毫相についての考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): thirty-two marks, the white tuft between the brows, Buddha' s body expression, wheel-turning monarch 作成者: 小笠原, 亜矢里 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/870

Study on the Thirty-two Marks and the White Tuft in the Āgamas and Nikāyas

OGASAWARA Ayari

Key words

thirty-two marks / the white tuft between the brows / Buddha's body expression
/ wheel-turning monarch

Summary

The thirty-two marks have long been known as the symbol of the Buddha. Among them, the white tuft between the brows (Uṇṇa, 白毫相) appears in the older strata of Sutta-nipāta (Sn.) along with the wide and long tongue (広長舌相) and the hidden male organ (陰馬藏相). And they constitute some of the qualities of a “Great Man” and also became indispensable elements for the production of Buddha statues.

The white tuft between the brows played an important role through many periods and over multiple regions. According to Sn, the shape of the white tuft of hair between the brows originated in the depiction of Brahmins of ancient India. This view is also supported by the findings in the field of anthropology, but its exact origin is still not clearly known. Based on Sn. and oral tradition, it seems that white tuft between the brows was originally a white tuft of hair. The form, then, became circles and orbs visible in the expressions of the Buddha statues around the beginning of the first century.

Certainly, due to geographical and historical factors, there exists a theory that the influence of foreign culture, such as the “xvarnah” of the Iranian ethnic group, was considered to be considerable. However, even if such a tendency is seen in the backlight and the marks, it is difficult to conclude that the white tuft between the brows entered from a culture outside Indian culture, when it is thought

to have derived from Brahmin of ancient India.

And the findings of previous studies have shown that there were three streams of development with regard to the thirty-two marks of Buddha that includes the white tuft of hair between the brow in the Pāli Canon. Among them, it is described as “odātā mudu-tūla-sannibhā” (like white and soft cotton).

Furthermore, those descriptions in the older strata of the thirty-two marks often contain a phrase “Monarch (cakkavattin) if stays in the secular world, Buddha if renounces the world” in Sn, which is considered to belong to the oldest stratus of the Canon. This is a common expression found among all three streams of development in the Pali Canon.

Thus, these descriptions show that 1) the thirty-two marks as the characteristics of Buddha and 2) the secular projection of Buddha as a “monarch” were often expressed together as a set phrase, which then were expressed in the production of Buddha statues. In addition, the descriptions of the white tuft is seen in the Sn. chapters that are said to be older than the chapters that describe the “monarch” in Sn, which again demonstrates its ancient quality.

阿含・ニカーヤにおける三十二相と白毫相についての考察

小笠原 亜矢里

阿含・ニカーヤにおける 三十二相と白毫相についての考察

小笠原 亜矢里

〈キーワード〉三十二相 (*Lakkhaṇas*) / 白毫相 (*Uṇṇa*) / 仏身表出 (Buddha's body expression) / 転輪王 (*cakkavattin*)

叢書類略号表

大正蔵	大正新脩大蔵經
DN	<i>Dīgha-nikāya</i> . PTS ed.
DN-A	<i>Dīgha-nikāya-aṭṭhakathā</i> . PTS ed
MN	<i>Majjhima-nikāya</i> . PTS ed.
Sn	<i>Sutta-nipāta</i> . PTS ed.

はじめに

仏の三十二相は原始仏教の時代より「仏の特徴」として知られているものである。中でも白毫相は、広長舌相、陰馬藏相と共に Sn. の中でも古いとされる層で既に説かれている偉人相（大人相）であると同時に、仏像などの造形物でも欠くことのできない相好である。

この白毫相は、大乘仏教になると特に四世紀後半～五世紀以降、『観仏三昧海經』に代表されるような仏を觀ずる經典において、三昧対象の一つとして重要な役割を持つようになり、浄土經典である『観無量寿經』の第九真身觀においても、無量寿仏の一切の仏身を觀ずるといった重要な意味を持つ相となる。

この白毫相を觀ずる行法は、日本浄土教における源信の『往生要集』へと引き継がれていき、中でも『往生要集』雜略觀の別巻とされる『阿弥陀仏白毫觀』では、その觀白毫相と往生が密接に結びつき、その後の日本浄土教でもこうした白毫觀に関する著述が多く見られるようになったのは、

先学らの研究によって様々な角度から指摘されているところである¹⁾。

このように、白毫相は仏の相好のなかでも特別な役割を果たしていることがわかっているが、五世紀以前の白毫相については、三十二相の一つとして言及されるにとどまっており、白毫相そのものに着目した研究はあまり見られない。

そこで、本稿では、釈尊の白毫相に注目して原始仏教からその形状や表現の変遷を辿り、特に阿含・ニカーヤ関係について検討していくものとする。

1. 仏の相好 (*Lakkhaṇa*) について—三十二相と白毫相—

1.1. 仏の相好—相好と三十二相—

仏典における相好の個数であるが、これは三十二だけではなく、三十二を中心として数の増減がみられる。例えば『観仏三昧海經』のように、三十二相に含まれるものに全く別の相が加わって五十六相となっているものや、同じ三十二相でも、同一部位が複数の表現で扱われている経典も存在する²⁾。

この「三十二」という相好の個数も、古来より八を数量の倍数単位とする「インド民族の慣習であった」³⁾ とする指摘から、個数自体に重い意味はないといった解釈も可能である。

また、三十二相は「然るに三十二相の名称及び順位に就きては諸経論に異説あり」⁴⁾ とあるように、今日一般的とされる三十二相でも、経典によって相好に関する表現の違いや細かい出入りがあることも確認されているが、『望月仏教大辞典』や『総合仏教辞典』など著名な辞書において例示されている三十二相は、主に『大智度論』や『瑜伽師地論』よりの出典となっている。

相好の出入りに関しては、例えば大乘経典などでは、仏の足に関する相好として「足趺高相」が多く含まれるが、阿含経典では「趺」は見当たらず、代わりに『中阿含経』『三十二相経』では、「踵」、「足兩踝傭相」が入っているなどの違いがみられる⁵⁾。

また、例えば上記「三十二相経」では、第三十二相「白毛」であるが、漢訳經典においては通常は「白毫相」「眉間相」とされることが多いなど、仏典による表現の違いも確認できる⁶⁾。

次に、相好と三十二相の具体的な展開であるが、これは造形的な仏像と教義的な仏典の二通りの側面から見ていくことが可能である。

嶋善一郎博士の定義によると、「相」とは「かたち」であって「具體的」なものを指す、とあるが⁷⁾、仏の相好は仏像の造形と関わりが深く、原始仏教以来守られてきた伝統、いわゆる「仏陀なき仏伝図」（仏身の不出）から、今日我々が目にする具体的な形である「仏像」（仏身の表出）への移行は、まさにこの相好の具体化といえることができる。

仏像は、今日では、カニシカ王の即位（127/128年）より遡ること数十年前の西暦100年頃にはガンダーラ及びマトゥラーで製作されていたと推定されるが⁸⁾、その製作の理由に関しては、大乘仏教の興隆に伴う仏身論の教理に基づいたものなのか、又は外来系民族の南下と仏教への改宗に基づく在家的要請とその影響によるものなのか、複数に亘る学問分野の専門家によって議論はされてはいるものの、未だはっきりとしない点も多い⁹⁾。

仏像製作の基本となる相好に関しても、原始仏典における「大人の相」が参考にされているように見受けられるが、何を以て三十二相とするかは、最初から固定されたものではなく、そうした大人（偉人）の相好として古来より知られていた主たるものが、付加されて三十二に整えられたものではないかとされている¹⁰⁾。前述したように「三十二」そのものが重い意味を持つものではないとするならば、仏像における相好の出入りや、仏典上の相好数の増減があっても不自然なことではない。

更に、仏教美術の観点からは、例えば手足の網縵相などのいくつかの相好は、仏像製作上の都合で、後に加えられた相好（指の毀損脱落防止の為）であると主張されるものもあるが¹¹⁾、少なくとも手足網縵相の場合は、仏像の年代と形状からして相好の存在が先であるとされている¹²⁾。

また、仏典との関係であるが、この三十二相を含む偉人相は、後述するように原始仏典においても既にいくつか記述があり、パーリ仏典において

は、岡田行弘博士の詳細な研究により、DN.14. *Mahāpadāna S.*, DN.30. *Lakkhaṇa S.*, MN.91. *Brahmāyu S.* の三系統で、三十二相に関する個別の記述が存在することがわかっている¹³⁾。また、その場合は、仏陀に限らずバラモンを含む「大人の相」として説かれている¹⁴⁾。

更に、三十二相のいくつかの相は、原始仏典の中でも比較的古層とされている Sn. で既に偉人の特徴 (*mahāpurisa-lakkhaṇa*)¹⁵⁾ として、個別に述べられている点は重要である。

「諸々の神呪（ヴェーダ）の中に、三十二の完全な偉人の相が伝えられ、順次に一つ一つ説明がされている。」

（中村元訳『ブッダのことは』岩波文庫 1984 年 p.213, 1000 偈）

〔師いわく〕、「かれは舌を以てかれの顔を蔽う。かれの両眉の中間に柔らかい白い毛（白毫）がある。かれの陰所は覆いに隠されている。学生よ、（かれの三つの特徴を）このように知れ。」

（同上中村 p.216, 1022 偈）

このように、Sn. においても偉人相としての三十二相は既に存在するが、広長舌相、陰馬藏相、白毫相の三相のみに個別の記述が認められる。このことから、本稿で取り扱う白毫相は、他の二相と共に原始仏典の比較的古い時代から、主たる偉人相の一つとして認められていたことがわかる。

1.2. 「白毫相」の起源と形状

比較的古い時代から、主たる偉人相の一つとして認められている白毫相は、Sn. 等の古層の原始仏典上で見られる以外にも、仏像の製作において、ほぼ共通して加えられる相好の一つでもある。

仏像の製作にあたってはこの相が省略されることは考えにくく、彫出が見られないものであっても、顔料などを用いてこの相を書いていたものと推測されている¹⁶⁾。確かに、白毫相は三十二相の中でも、具体的に造形し

やすく目立つ相であるが、その形状については原始仏典と仏像との間で大きな差が見られる。

仏典における形状に関しては2節で詳述するが、白毫相 (uṇṇa) はパーリ仏典では (odātā mudu-tūla-sannibhā) 「白く柔らかい綿のような」と説かれるものがよくみられ、このことから、白毫相とは元々そうした「柔らかい白い毛が眉間に生じた相」を意味するものであることがわかる。

ニカーヤにおいては、白く柔らかな塊状のもの、若しくはそれを伸ばした糸状のもの、どちらも解釈は可能であるが、DN-A. では伸ばした状態と放した状態の両方が解説されている。

esā koṭiyam gahetvā ākaḍḍhiyamānā upaḍḍha-bāhu-ppamānā hoti vissatṭhā dakkhiṇ' āvaṭṭa-vasena āvattitvā uddhaggā hutvā¹⁷⁾

端を以て引かれているならば、腕半分の量となる。放たれれば、右旋 (dakkhiṇāvaṭṭa) によって転じて、高くなって留まる¹⁸⁾。

更に、この仏典上の白毫相に関しては、「信仰あるいは願望等から来る特殊表現のものは別としても、白毫相そのものの実在を否定する事は出来ない」¹⁹⁾ とする説がある。

仏典に記載されている表現を逐語的に当て嵌めるのは難しいが、確かに人体に生える「白く長い毛」というのは、珍しくはあるが実在する形状であり、今日でも、いわゆる「宝（福）毛」と呼ばれるものの一種と看做すことは可能である。

一方、仏典上の白い毛状である白毫相に対して、相好の具体化ともいえる仏像製作、特にガンダーラ仏などにおいては、白毫相は球状の突起物（若しくは陥没状態）で表されることがほとんどである²⁰⁾。

釈尊入滅後、インドでは長い間仏身不表出の時代が続き、仏教説話図が盛んにストゥーパの欄楯などに施されていたシュンガ・アーンドラ時代もそれは守られ続けてきた²¹⁾。

仏像製作以前の仏身の表出としては、一世紀初頭のティリヤ・テペ出土のコイン（「彼は法輪を転じる」定方晟訳）が最古とされており²²⁾、更にスワート地方ブトカラ遺跡の初期グループ（紀元前後頃とされる）の仏伝図「梵天勧請」において、仏の白毫相が認められている²³⁾。

ブトカラ遺跡の年代特定は難しいとされているが、ブトカラ初期グループでは、この仏身の表出以前とされる最初期の菩薩像においても既に白毫相らしきものが見られるところから²⁴⁾、ティリヤ・テペのコインとそう遠くない一世紀の初め頃には、まず菩薩、続いて仏伝図における仏身の表出が試みられ、同時に相好としての白毫相も表出されていたと見るのが可能である。

前述したように、仏像そのものの出現理由については、学問分野を超えて様々な説が存在するが、仏身の表出に関しては、仏伝図での仏身表出の後に仏像が製作されていたことが、発掘された様々な資料からわかっている。

また、仏教美術の専門家田辺勝美博士は、「仏像の白毫相」は、イラン系民族の言語エリアにおける王権の象徴とされるフヴァルナー (*xvarnah*)²⁵⁾の具現化としての、瘤、痣、黒子等、皮膚の異形に由来するものと主張する²⁶⁾。

これは、ゾロアスター教ないしイラン系民族の王権神授の考え方に基いたもので、国王は神から授与されたフヴァルナーの特徴（瑞相）を身体に有することが、その地位にある条件とされたという説が基となっている。実際、クشان朝で鑄造されたカニシカ王のコインでは、表がこのフヴァルナー（左頬の円文）を有した国王、裏にイラン系、インド系等の神々が刻印されているところから、田辺説では、「仏像の白毫相」は、そうした瑞相に倣って眉間に施されたというものである。

仏身不表出時代から、仏教説話図を通して語られてきた伝統的な口伝の他にも、Sn. 等の古層の仏典においても、偉人相としての相好は存在しており、仏の象徴としての白毫相自体の起源については、外来的な要因が大きいのとは考えにくい。

しかし、仏像製作に至る過程においては、比較的遅くまで仏身の不表出を保っていた南インドとは異なり、紀元初め頃には仏身の表出が行われ始

めたとみられる北・西北インドでは、文化的、地理的要因から外来系民族の影響が少なかったとはいえない。

その影響は、通常は仏足跡や聖樹で表されることの多かった仏の象徴が、ガンダーラ初期では、おそらくはフヴァルナーの影響で「日輪」となっているものが存在する²⁷⁾ ところからも解る。

そして、仏身の表出が行われるようになったクシャン朝以降、盛んに製作されていく仏像の白毫相は、仏典にあるような毛状というよりはもっと立体的な球状のものであり、「具体化された白毫相」と仏典上の「偉人相の白毫相」とで、その形状は大きく異なっていく。

この両者は、更に時代が下った五世紀の「観仏經典群」では、例えば『観仏三昧海經』のように、原始仏典由来の形状をした毛状白毫相を専ら観ずる經典であっても、「観像品」第九の観想で、「仏滅度後に現前に仏なくば、当に仏像を観ずべし」とされ、その上で「眉間毫を観ずるは、右旋宛轉する頗梨珠の如し。」²⁸⁾ とあり、仏像の頗梨珠（玻璃珠）状の白毫相を観ずる功德が説かれるようになる²⁹⁾。

つまり、原始仏典上の白毫相と仏像上の白毫相の形状の違いに関しては、原始仏典以来の形状に加え、仏像製作の段階での外来文化の影響も考えられ、両者ともに礼拝や観仏等の対象として、後の大乘經典で合わせて説かれていくと考えられる。

2. パーリ仏典及び阿含經における白毫相

2.1. 3ニカーヤと阿含經典

前述したように、パーリ仏典においては、白毫相を含む三十二相は DN.14 *Mahāpadāna S.*, DN.30. *Lakkhaṇa S.*, MN.91. *Brahmāyu S.* の三系統で説かれていることがわかっている。

まず、*Mahāpadāna S.* であるが、対応する漢訳阿含經典は、五世紀初頭訳出の『大本經』（大譬喻經）、『七佛經』、『毘婆尸佛經』、『七仏父母姓字經』の四本があるが³⁰⁾、白毫相について個別の表現があるのは、このうち

『大本經』のみで、これは釈尊誕生時における三十二相の一つとして述べられている。

パーリ文では *odātā mudu-tūla-sannibhā*³¹⁾ とあるが、漢訳では「三十一、眉間白毫は柔軟にして細澤。引くこと長さ一尋。放ちて即ち右旋の螺、真珠の如し」³²⁾ とあり、この部分は前述したように DN-A. にも見られる記述である。

この太子は、眉間に生じた白い、柔らかな木綿に似た一房の羊毛（白毫）をおもちです。この太子が眉間に生じた白い、柔らかな木綿に似た一房の羊毛（白毫）をもちますこと、これもその偉人がもつ相です。

（岡野潔「偉大な過去世の物語—大本經」『原始仏典』【第二巻】長部經典Ⅱ 2003年p.26）

次に *Lakkhaṇa S.* であるが、この漢訳は四～五世紀の東晋時代に訳出された『中阿含經』の「三十二相經」とされているが、同じく岡田博士の研究により、この『中阿含經』の「三十二相經」と、五世紀初頭北凉時代の『優婆夷淨行法門經』の三十二相を説く部分とが極めてよく一致していることがわかっている³³⁾。

「三十二相經」においても、大人は同じく白毫相を含む三十二相を成就するとある。また、パーリ文は *Mahāpadāna S.* とほぼ同じ表現 *odātā mudu-tūla sannibhā*³⁴⁾ であり、漢訳は「復次に大人の眉間、潔白にして右に縈（まつわる）毛が生ず。是謂わく大人、大人の相」³⁵⁾ となっている。

偉大な人は、眉間に毛があり、白く柔らかい綿毛のようです。じつに修行僧のみなさん、偉大な人の眉間に毛があり、白く柔らかい綿毛のようであるのは、また、修行僧のみなさん、偉大な人の大人相です。（岡田行弘「偉大な人の三十二の特徴—三十二相經—」『原始仏典』【第三巻】長部經典Ⅲ 2004年 p.199）

一方、『優婆夷淨行法門經』では、白毫（眉間）相は上記に同じく大人

相としての三十二相として述べられるが、こちらは、「三十二相経」と異なり、漢訳は「その眉間の毫相、兜羅綿の如し。」³⁶⁾と、兜羅綿 (tūla) の表現がそのまま音写されている。

最後に *Brahmāyu S.* であるが、これは「三十二相経」と同じく、『中阿含経』中の「梵摩経」と、それ以前の三世紀後半に訳出された『梵摩渝経』の二種類がある。

パーリ文は他二つと同じく *odātā mudutūlasannibhā*³⁷⁾ とあり、漢訳は「沙門瞿曇の眉間に潔白にして右に縈（まつわる）毛が生ず。是謂わく、尊き沙門瞿曇大人、大人の相。」³⁸⁾とあり、『中阿含経』中の「梵摩経」でも、「三十二相経」と同じく「潔白右縈」である。

かのゴータマ尊者は、白毫をもっています。それは同時に眉間にはえた白くて、柔らかい木綿のような毛です。（勝本華蓮「偉大な人の身体的特徴と行動—梵摩経」『原始仏典』【第六卷】中部経典Ⅲ 2005年 p.269）

しかし、支謙訳出の『梵摩渝経』においては、「三十一相、白毛は眉中に時（とどま）る。」³⁹⁾とのみ記述されている。この経典は訳出年代が三世紀後半と他の漢訳よりも少し早い時代であること、また、経典の後半部分で「佛眉一相の徳は、恒沙に算ずべし。眉間の黝、籌計すべきこと難し。」⁴⁰⁾とあり、これは大人相とは直接関係なく、個別の仏徳を表すものであり、他の漢訳とは異なる性質を持つ。

以上のように、白毫相を *odātā mudu-tūla-sannibhā* とするパーリ仏典に対応する漢訳阿含経典は、三世紀訳出の『梵摩渝経』を除いては、およそ四世紀後半～五世紀初頭に訳出されたものであり、これらにおける白毫相の特徴としては、具体的には、誕生時や大人（相）の特徴を説明する場面において、他の相と共に三十二相の一つとして説かれているものがほとんどである。

また、形状的には、「白く柔らかい綿のような」に対して、「長一尋」「右旋」「如眞珠」「右縈」といった具体的な表現が加わっていることが挙げられる。

2.2. 漢訳阿含經典のみの「白毫相」との比較

また、2.1.のような、パーリ仏典と漢訳阿含經典に共通して見られる白毫相に対して、パーリ仏典には直接見られないが、阿含經典のみで見られる白毫相も存在する。

一つは『長阿含經』に含まれる *Mahāparinibbāna S.* の漢訳の一つである『遊行經』であり、もう一つは *Āṅgulimāla S.* 系列の漢訳『央掘魔羅經』、『増一阿含經』の三本で、いずれも五世紀以降の訳出である。

『遊行經』においては、釈尊が自身の放光の二因縁（成道時、般涅槃時）について説く場面において、白毫相は「釈尊の光」の象徴として偈で説かれる。

金色の衣光悦し 細軟にして極めて鮮淨 福貴世尊に奉る 白毫光は
雪の如くに (大正蔵 vol.1, no.019,0019c)

『央掘魔羅經』では、白毫相は沙門の特徴としてみられ、こちらも偈の中で「月光を踰える明淨」と光の関係が述べられる。なお、ここでの相好は八の倍数である四十八相となっている。

我今稽首禮す 四十八大人相 無量の諸功德 淨らかな蓮華敷の如し
眉間白毫相 月光を踰える淨らかな明り (大正蔵 vol.2, no.120,0532c)

『増一阿含經』は、同じく *Āṅgulimāla* について説かれるが、五逆の者の為に眉間相（光明）を放つとあり、同じく眉間相と光の関係が見られる。ただし、こちらは偈ではなく、また、「眉間相」となっている点が異なっている。

此の鸯掘魔、當に五逆、即ち眉間相を放つべし。光明普く、彼の山林を照らす。
(大正蔵 vol.2, no.125,0719c)

以上のことから、これらはパーリ仏典と対応する漢訳に見られたような、「柔軟細澤」「如兜羅綿」「如真珠」「長一尋」「右旋」といった相好の客観的な形状とは異なり、「如雪白毫光」(偈)、「眉間白毫相 明淨踰月光」(偈)、「即放眉間相。光明普照彼山林。」といった、白毫相に「光」の性質が結びつく形となっている点に加え、白毫相が三十二(四十八)相中から独立して、偈の中などで単独に述べられているなどの形式的な違いが見られる。

3. 白毫相(三十二相)を持つ者の前途

3.1. 阿含・ニカーヤにおける三十二相と転輪王

仏典においては、白毫相を含む三十二相を持つ者について、辞書等にも挙げられる通り「在家に在れば転輪(聖)王、出家をすればブッダとなる」という文言が定型句となっている。

この定型句は Sn. や阿含・ニカーヤにおいても見られるが、仏教における「転輪王」は、社会的に表される仏陀観の一つとされる説もある⁴¹⁾。そこで、2節において調査対象とした、三つのパーリ仏典と、対応する漢訳における三十二相を持つ転輪王について比較をしておく。

Mahāpadāna S. では、転輪王(cakka-vatti)の記述と、真理(法)の王(dhamma-rājā)、四方を支配する七宝を持つ者(cāturanto vijitāvī janapadatthāvariappatto satta-ratana samannāgato)が偉人の特徴として挙げられている⁴²⁾。

『大本経』ではこれに加えて「四天下の王、四兵を具足して、正法を以て治むる。」「兵杖を用いずして天下を太平す。」⁴³⁾とある。

Lakkhaṇa S. でも、同じく転輪王(Cakkavatti)と徳高き真理の王(dhamma-rājā)、四方の支配者、国の支配者、七宝の支配(cāturanto vijitāvī janapada-tthāvariappatto satta-ratana-samannāgato)とあり⁴⁴⁾、「三十二相経」では『大本経』と同じく、「四種の軍有りて、天下を整え御する。」及び「刀杖を以てせず、法教を令するを以てして、安樂を得せしむ。」⁴⁵⁾とある。

Brahmāyu S. でも、転輪王 (cakkavattī)、正しい法を守る王 (dhammarājā)、四方を征服して国土に安定をもたらし、七つの宝をもつ (cāturanto vijitāvī anapadatthāvariyaṃpatto sattaratanasamannāgato) とあり⁴⁶⁾、漢訳も『大本経』や「三十二相経」と同じく「有四种軍整御天下」「不以刀杖以法教令令得安隱」⁴⁷⁾ が加わっている。

以上のことから、2 節で述べた三十二相を含むパーリ仏典と漢訳阿含經典においては、在家にある白毫相を含む三十二相を持つ者の前途は、パーリ仏典では転輪王 (cakkavatti) の記述と、それを表す真理の王 (dhamma-rājā)、四方の支配者、国の支配者、七宝の支配者 (cāturanto vijitāvī anapadatthāvariyaṃpatto sattaratanasamannāgato) とあり、漢訳阿含經典においては、更に「四軍を以て」とする具体的な武力を示す表現、また「刀杖を以てせず、法教を令するを以てして」と、法の優位性を示す意味部分が共通して存在することがわかる⁴⁸⁾。

3.2. Sn. における三十二相と転輪王

三十二相を持つ者の前途に関して古い文献とされているのは Sn. であるが、それは三章 Mahāvagga (*Sela S.*) と五章 Pārāyanavagga において説かれている。このうち、1.1. で挙げた偉人相としての広長舌相、陰馬藏相、白毫相の三相を個別に扱っているのは五章のみである。

Sn. は幾層かが重なり合って編纂されているとされ、新古を明確に判断することは難しいが、これまでの研究によって 4 章 Atthakavagga と 5 章は比較的古層に属するということがわかっている。しかし、同じ五章でも序文 (976~1031 偈) が、注釈書とされている *Cūḷa-Niddesa* (小義釈) に記載が無いところから、この序文の箇所は後の付加ではないかと指摘されている⁴⁹⁾。

三十二相について記述のある 999~1022 偈というのは、ちょうどこの「序文」に該当する。そのため、五章自体は古いとされるが、この白毫相を含む三十二相およびその前途が説かれた部分は、その古層には該当しない可能性もある。

次に転輪王についてであるが、こちらは三章と五章とでは記述の有無が異なっている。

もしもかれが〈転輪王〉として家にとどまるならば、この大地を征服するであろう。刑罰によらず、武器によらず、法に依って統治する⁵⁰⁾。

第五 彼岸に至る道の章（前掲中村 p.213, 1002 偈）

五章における上記 1002 偈では、パーリ文では三十二相に付随する「転輪王」(*cakkavattin*) の言葉がなく、「法によって統治する」(*dhammena-m-anusāsati*) とのみあり、この *cakkavattin* は注釈書である *Paramatthajotikā* にも見られない⁵¹⁾。

これに対して、同じ Sn. の中でも、三章の *Sela S.* 552~554 偈では、「転輪王」(*cakkavattin*) といった表現、またこの後「転輪王」の具体的な象徴である「四方を征服して」、または「戦車兵によって」との記述がある。

あなたは転輪王（世界を支配する帝王）となって、戦車兵の主となり、四方を征服し、ジャンプ州（全インド）の支配者となるべきです⁵²⁾。

第三 大いなる章（前掲中村 p.124, 552 偈）

これらのことを、3.1. でみた原始仏典由来の三十二相を持つ者の記述と比較すると、三系統のパーリ仏典及び漢訳阿含經典では、すべて「転輪（聖）王」(*cakkavattin*) の記述があり、Sn. の三章 *Sela S.* に近いものであることがわかる。また、「四方の支配者、(四) 軍をもって」といった部分の表現も *Sela S.* に一部重なっている。

このように、Sn. の中で転輪王は三十二相と共にみられるが、中でも古いとされている五章においては、転輪王の具体的記述はないのに対して、三十二相中の白毫相は既に個別の記述があり、白毫相はかなり古くから仏身の象徴として説かれていたことが推察される。

結 語

阿含・ニカーヤにおける釈尊の白毫相とは、基本的にはインドに古くから伝わっていた「偉人相」（大人相）から発展したものと考えられるが、その形状が一世紀初頭の仏身表出時に外来文化の影響を受けたことは、他の相好も含めて仏伝図や仏像から推察できるものである。こうした違いが、造形的な白毫相と教理上の白毫相といった、異なる形状の白毫相が後世に伝わっていく一つの要因と考えられる。

白毫相の記述のある三系統のパーリ仏典においては、形状の上で仏像とは異なる *odātā mudu-tūla sannibhā* が共通して挙げられているが、漢訳阿含經典では「柔軟細澤」「如真珠」「長一尋」「右旋」といった白毫の長さや具体的な形状も説かれており、この相違については今後 *Aṭṭhakathā* や他の仏典との比較検討をすべき点である。

また、パーリ仏典には見られず、五世紀以降訳出の対応漢訳阿含經典のみにみられる白毫相は、原始仏典にあるような、単なる偉人相としてのみならず、光と関係した表現となっており、その位置付けも、三十二相の一つとしてではなく、個別に説かれるものであることから、白毫相の持つ役割や意味が原始仏典とは異なっていることが考えられる。

また、白毫相を含む原始仏典における三十二相を持つ者の進む道としては、「在家にあつては転輪王、出家をすればブッダ」といった定型句が共通して見られるが、Sn. を見ていくと、この定型句は、三章 *Mahāvagga* (*Sela S.*) にもその記載があり、しかも、三十二相を説く三系統のパーリ仏典及び漢訳阿含經典と共通する描写も多い。また、五章 *Pārāyanavagga* では転輪王の具体的な記述はないものの「前途」と白毫相は個別で明記されている。

転輪王は、最古の仏身表出とされるティリヤ・テペ出土のコインからも推測されるように、具体的な社会的仏身表現の一つの形ともみられ、三十二相と共に仏典上に説かれるものであるが、白毫相は、Sn. において

はこの転輪王の記述よりも更に古いとされている層に既に存在するところから、その由来の古さが推察できるのである。

註

- 1) 福原隆善『『往生要集』の白毫観』『浄土宗学研究』通号 15/16、1986 年、
「仏典における白毫相」『印度學佛教學研究』40-1、1991 年、他多数
西村岡紹『『阿弥陀仏白毫観』の研究』『叡山学院研究紀要』通号 21、1999 年
- 2) 『中阿含経』『梵摩經』では二十八相であるが、第二十二相「四十齒牙、平齒、
不疎遠齒、白齒」を五相に開くと三十二相となる。逸見梅榮『仏像の形式』東出
版、1970 年、p.32
- 3) 同上逸見、pp.33-34
- 4) 『望月仏教大辞典』(5)、p.1554
- 5) 前掲逸見、附表の一「三十二相表」、「三十二相経」大正蔵 vol.1, no.26,493c
- 6) 「白毛」は『梵摩渝経』『坐禪三昧経』『大智度論』などで見られる表現である。
- 7) 嶋善一郎「仏典に見られる相好の研究 (一)」『印度學佛教學研究』10-2、1962
年、p.615
- 8) 田辺勝美『仏像の起源に学ぶ性と死』柳原出版、2006 年、p.5
- 9) 代表的なものとしては、仏像製作は仏教教団や教理とは関係がないとした高田
説、応身仏の教理に基づくとされる平川説、近年ではクシャン族との関わりを大
きく取り上げた田辺説などがある。
- 10) 中村元『仏教美術に生きる理想』春秋社、1995 年、p.307
- 11) 前掲逸見、p.37
- 12) 勝本華蓮「手足網縵相の意味」『印度學佛教學研究』54-1、2005 年、p.404
- 13) 岡田行弘「三十二大人相の系統(Ⅰ)」『印度學佛教學研究』38-1、1989 年、
pp.303-304
- 14) *Brahmāyu S.* (MN. PTS.vol. Ⅲ) などはその代表的なものである。
- 15) *The sutta-nipāta* 193,11 以下、本稿のテキストは特記を除き全て PTS 版を使用する。
- 16) 前掲逸見、p.48
- 17) DN-A. vol. Ⅱ 451,29-30
- 18) 越後屋正行「三十二大人相の注釈的要素」『印度學佛教學研究』58-1、2009 年、
p.356
- 19) 嶋善一郎「佛説観無量寿經に於ける白毫相について」『龍谷大学論集』361、
1959 年、pp.56-57
- 20) 田辺勝美「眉間白毫相のイラン起源考」『仏教芸術』(162)、1985 年、pp.34-38。

- 21) 仏身不表出の根拠は「梵網經」や Sn.『増一阿含經』などに求められるが、『金剛般若經』に求める説もある。田中公明『仏教図像学』春秋社、2015 年、pp.9-11
- 22) 宮治昭『インド仏教美術史論』中央公論美術出版、2010 年、p.56
- 23) 同上宮治、p.66
- 24) 同上宮治、p.60
- 25) 原義は good thing for men（富、財産、健康、家畜、吉祥、栄光、幸運などに相当）前掲田辺、pp.57-60
- 26) 前掲田辺、pp.57-61
- 27) 同上宮治、p.65
- 28) 「観眉間毫、如頗梨珠右旋宛轉。」大正蔵、vol.15, no.643,690c
- 29) 仏像を観ずる「像観」自体は、『般若三昧經』1 卷に「作佛形像。用成是三昧故。」（大正蔵 vol.13, no.418,906a）と説かれるが、仏像が作られた起源が「観仏の為」であったとは断定できない。
- 30) 赤沼智善『漢巴四阿含互照録』法蔵館、1958 年。以下、本稿における漢訳対応の参照とする。
- 31) *Mahāpadāna S.* 18,31
- 32) 「三十一眉間白毫柔軟細澤。引長一尋。放則右旋螺如眞珠。」大正蔵 vol.1, no.1,5b
- 33) 岡田行弘「三十二大人相の系統（Ⅱ）」『印度學佛教學研究』40-1、1991 年、p.13
- 34) *Lakkhaṇa S.* 144,25-26
- 35) 「復次大人眉間生毛潔白右縈。是謂大人。大人之相。」大正蔵 vol.1, no.26,494a
- 36) 「其眉間毫相如兜羅綿。」大正蔵 vol.14, no.579,955a
- 37) *Brahmāyu S.* 137,7-8
- 38) 「復次尊。沙門瞿曇眉間生毛潔白右縈。是謂尊沙門瞿曇大人大人之相。」大正蔵 vol.1, no.26,686c
- 39) 「白毛眉中踣。」大正蔵 vol.1, no.76,884a
- 40) 「佛眉一相之德恒沙可算。眉間之動難可籌計。」大正蔵 vol.1, no.76,885b
- 41) 藤田宏達「転輪聖王について—原始佛教聖典を中心として—」『印度學佛教學論集』1954 年、pp.148-150
- 42) *Mahāpadāna S.* 16,10-19
- 43) 「王四天下四兵具足以正法治。」「兵杖不用天下太平。」大正蔵 vol.1, no.1,4c
- 44) *Lakkhaṇa S.* 142,6-13
- 45) 「有四種軍整御天下。」「不以刀杖以法教令得安樂。」大正蔵 vol.1, no.26,493b
- 46) *Brahmāyu S.* 134,17-23
- 47) 大正蔵 vol.1, no.26,685a
- 48) 漢訳阿含經典における「転輪王」は、「輪王神話」としての描写が具体的に細微

を極め、統一国家の理想としてのアショーカ王の治世を思わせるものとされている。前掲藤田 p.153

- 49) 水野弘元『南伝大蔵経』(24)、大蔵出版、pp.386-387
- 50) *The sutta-nipāta* 193,13-14
- 51) *Sutta-Nipāta Commentary II Paramatthajotikā II*, 2, 583,8-9
- 52) *The sutta-nipāta* 108,24-25

(武蔵野大学大学院博士後期課程(専門)相好・白毫相)